

「問題な日本語」型構文の分析

A Study on the “*Mondai-na Nihongo*” Construction in Japanese

王 崗
深圳大学

要旨

「問題な日本語」型構文は、比較的新しく、しかも不安定な用法であるため、内外からの関心がまだ低く、関係の研究や分析が少ない。本稿では、そういった研究の現状に着目しながら、当該構文の語例を整理分析したうえで、その用法の成立および意味用法の特徴を検討してみた。語例の整理を通して、カタカナ語名詞が「な」に前接することが多く、用語の移り変わりも激しいということが明らかになった。用法の成立については、当該構文は、一般にイメージされる異常な表現ではなく、日本語のことばの変遷に伴う一種の新生の表現手法ではないかと本稿では指摘した。そして、意味用法の特徴としては、基本的に前項名詞に付随しているある種の性質や属性的な意味合い、ニュアンスなどを表現したいときに、当該構文を用いることが考えられる。

キーワード：

「問題な日本語」型構文、名詞、「な形容詞」、「な」「の」、属性

「問題な日本語」型構文の分析

王 崗
深圳大学

1. はじめに

『問題な日本語』（北原 2004、大修館書店）という本のタイトルが目に入ったときに、多くの購読者は、「問題」と「日本語」の間になぜ「な」形態で連体修飾がなされているのかと、不思議に思うかもしれない。なぜなら、「問題」が名詞なので、「問題の日本語」が自然な表現であるからだ。

しかし、日本の新聞・雑誌やインターネットに目を向けると、「神戸な人」、「大人な対応」、「味な企画」、「萌えな店」など「問題な日本語」タイプの構文形式が、ごく普通のように使用され、目にすることができる。

現代日本語においては、文法、語法などの体系がかなり整っていると思われる。例えば、文構造においては主語、述語、目的語、連用修飾語、連体修飾語など、品詞には名詞、動詞、形容詞、助詞、代名詞など整然と区分されうる。しかしながら、前記した「神戸な人」、「大人な対応」、「萌えな店」のように「名詞→な形容詞」のバリエーションについては、合理的な解釈を与えるのがさほど容易なことではないだろう。そこで、本稿では、現代日本語における「名詞 1+な+名詞 2」すなわち「問題な日本語」¹のような構文形式を取り上げ、それはなぜ可能なのか、そして、どのような用法特徴がみられるのかについての疑問を紐解いてみたい。

2. 先行研究の検討

比較的新しく、しかも不安定な用法のためか、「問題な日本語」型構文への関心度が内外ともにまだ低く、関係の研究や分析が少ない。現時点においては、中山(2004)、影山(2009)、村木(2012)、草野(2018)、京谷(2019)など数点の考察しか見当たらない。以下、これらを順次整理したうえで、本稿の試みを提示する。

¹ 本稿では、便宜上、「神戸な人」など「名詞 1+な+名詞 2」の構文形式をいずれも「問題な日本語」型構文と呼び、その意味用法を検討する。また、いわゆる形容動詞、名容詞、第二形容詞の類をいずれも「な形容詞」として扱う。なお、本稿で取り上げる「な形容詞」の用法は、名詞を修飾するときの「な」「の」の形式選択というところ限定する。

中山(2004)は、主に「特別な思い」と「特別の思い」のように「な」「の」のゆれについて分析を加えているが、名詞と第二形容詞(=な形容詞)との違いとして、「梅田のお店」と「梅田なお店」を例に「問題な日本語」型構文への言及もした。その中で、「梅田のお店」は名詞の「の」格であることから「梅田にあるお店」という意味で「関係規定的」であり、「梅田なお店」は「梅田っぽい(梅田らしい)お店」という意味で「属性規定的」である(p.131 参照)と述べた。

影山(2009)、村木(2012)は、連体修飾において「名詞+な」の形が形容詞性の語だけではなく、名詞性の語にも用いられることに注目し、その意味と理由について若干の考察を行っている。

まず、影山(2009)では、名詞の属性や状態に触れた際に、「問題な日本語」型構文にも簡単に言及している。その中で、「脂性」、「気質」など辞書に名詞として登録されている単語に、本来なら「脂性の、職人氣質の」のように「の」をとるはずであるのに、「脂性な肌、職人氣質な人」のように「な」を用いた例もよく見かける(p.73 参照)と指摘した。そして、そのような表現については、名詞から形容動詞(=な形容詞)を作る派生接尾辞という新しい造語法とみなす(p.73-74 参照)という解釈をしている。

一方の村木(2012)は、名詞に「-な」を後置させて形容詞²のように使用した例について、以下のような語を用いて考察した。名詞としての「ニュース」が「まだ一般に知られていない、新しい、あるいは、珍しい知らせ」を意味するのに対して、「ニュースな人」と「な」を接続させて「ニュースな」とすることによって、「ニュース」の「まだ一般に知られていない、新しい、あるいは、珍しい」という属性部分を際立たせたわけである。また、名詞としての「土壇場」は「せっぽつまって、追い込まれている場面」を意味するが、「土壇場な人」における「土壇場な」は、「せっぽつまって、追い込まれている」という属性部分が前面に出てきたのである。名詞である「ニュース」「土壇場」を「の」を介してではなく、「な」にスライドさせて用いると形容詞になる。この品詞の転成は、意味の変化をもたらす。実体(あるいは対象)を意味した名詞が形容詞にかわると、その実体がそなえている属性へと移行する(以上 p.243-244 参照)と分析している。

² 村木(2012)がここで言っている「形容詞」は本稿の「な形容詞」にあたりと断っておく。

草野（2018）では、「N1+な+N2」(=「問題な日本語」型構文)における形態的・統語的考察を行った。その形態的な特徴は、「な」に付加される前接語はカタカナ語名詞に特徴的であり、語基の要素は語だけではなく、句から文レベルまで広範囲に「な」が付加できることを示した。また、後接語はモーダルな性質を持つ語が付加されることが特徴的であるということを示した。そして、その統語的な特徴は、一つは語基が属性概念を含んだ「述語用法」と「連体用法」2つを備えたものと、語基が属性を持たず「連体用法」のみを持つ「ニセ形容詞(疑似形容詞)」に分けられることを示した。一見すると、どんな「N1+な+N2」であっても統語的には似たような様相を呈しているように見えるが、実際に深く観察してみるとその統語性及び形容詞性は一様ではないことがわかる（以上 p.37 参照）と指摘している。

また、京谷（2019）は、「問題な日本語」とは、「問題という実体を表す日本語」「問題である日本語」という意味ではなく「問題という属性（～っぽい、～のような）を持つ日本語」という意味なのであろうと述べた。名詞であったものに「な」がつき、そのものが持っている性質を表すようになった。つまり以前は「の」で属性を表していたものについても、「な」を使って性質や属性を表すようになってきた(p.32 参照)と分析している。また、「神戸な」「ニュースな」「キャリアな」などに代表される純粋な名詞に「な」が付き、常に属性を表す表現については、2000年以前には見当たらないが、テレビや Google などのメディアからの用例により2000年以降には存在すると言えるだろう（p.37 参照）とも指摘している。

以上、「問題な日本語」型構文に関する先行研究の内容をまとめたが、全体的にみれば、中山(2004)、影山(2009)、村木(2012)の研究は、当該構文への言及がちらほら程度で、深くは立ち入っていないように思える。これに対して、草野(2018)、京谷(2019)による考察は比較的詳しいが、草野(2018)は当構文の形態的・統語的特徴およびそのあり方の生起要因を検討しただけで、その他の面への分析はなされていない。京谷(2019)は、「問題な日本語」型構文のほかに「曖昧」など「名詞」と「な形容詞」にまたがる語への分析も行ったため、一点集中的な考察は展開していない。よって、本稿では、まず社会的な認知度がまだ低く、従来にはなかったと思われる「問題な日本語」型構文の語例を抽出して整理分析する。そして、そのうえで、草野(2018)、京谷(2019)などで当構文について未検討または検討が不十分な部分、例えば用法の成立や意味用法の特徴などを突き止めたい。

3. 「問題な日本語」型構文例の整理

京谷（2019）によると、「問題な日本語」型構文は2000年以降には存在するといわれる。草野（2018）でも、「N1+ナ+N2」（＝「問題な日本語」型構文）は最近になりよく目にするようになった表現であり、若者を中心に使用されている印象を受ける。そして、日常生活や商品名、新聞などに幅広く使用されており、使用頻度も以前に比べてかなり増えているように感じられるが、先行研究はすべて2000年代に入ってから行われていることから、新しい表現であると推測している。ということは、「問題な日本語」型構文は、大体2000年以降に徐々に多用され、注目されてきたものだといえよう。そこで、以下、まだそれほどなじまれていない「問題な日本語」型構文例を、中山(2004)、影山(2009)、村木(2012)、草野（2018）、京谷（2019）、「Yahoo! JAPAN」サイトから拾い集めて大まかにまとめる³。

表1 「問題な日本語」型構文の用例

「な」の前接語の種類	用 例
漢語名詞	ギョーテン（仰天）な一面、携帯な毎日、現実な対応、軍団な感じ、旬な食材、女王な挑戦者、女子な気分、初日な気分、耐震な感じ、日本代表な部屋、美脚なチェックパンツ、美人な嫁、病気な感じ、変態な感じ、満面な笑顔、問題な生徒、野獣な感じ
和語名詞	田舎な群馬県、瓜二つなそっくりさん、お宝な家、大人なイメージ、子供な感じ、素な感じ、どんよりな天気、ナマ（生）な感じ、ボンボンな感じ、萌えな店
外来語名詞	エステな生活、オアシスな家、キャリアな女性、グラスルーツな感じ、クリスマスなシリーズ、コンビニな感じ、ショックな幕開け、スキルな人材、ストリートな人々、スノッブな客、スフレなチーズケーキ、タイプな男、ニュースな人、パーズンな音、ハッスルな時期、パンクな人生、パンダなマスコット、ピースなサムライ、ホステスな感じ、マリンな深Vボーダー、マンネリな作品、メルヘンな雰囲気、ライブなお花見、ラブな話題、リゾートな感覚、ワインな気分
混種語名詞	新しいノートな感じ、オタク（おたく）な人々、隠れ家な家、企画屋な感じ、土壇場な人
固有名詞	江川な人、えなりなタイプ、梅田なお店、沖縄な景色、京都なお店、神戸な人、スラムダンクな友情論、ディズニーな雰囲気、東大な人々、hitomi な女性、平安な感じ、ホンジャマカな日曜日、レオパレスな人々

³ 表中の語例は、厳密な分類ではなく、あくまで参考までに、読み方や形態に基づいて簡単に整理しただけのものである。

意識的な収集ではないわけだが、表 1 に目を通す限りでは、外来語名詞が「な」に前接するケースが圧倒的に多く、ついで漢語名詞、固有名詞、和語名詞の順となっていることがわかる。中山(2004)、草野(2018)にも、「問題な日本語」型構文には前項名詞がカタカナ語であることが多いという指摘があった。そして、草野(2018)では、カタカナが多く用いられる理由は、カタカナ語に対するイメージが良いためプラスのイメージを持たせたいときに使うからであろう(p.27 参照)と推測している。もう一つとしては、新世紀以降のインターネットの普及やグローバル化の加速で、国家間の連携が緊密化するにつれて、日本に流入している外来語も今まで以上に増えてきているため、新鮮な意味合いやニュアンスを強調したい時に、多くの日本人、特に若者たちが、「外来語名詞+な」の形式を愛用するようになったのではないかと、ということも想像に難くない。一方、「な」に前接する漢語名詞の比較的多用は、連体修飾形態素「な」「の」の選択または併用がもともと名詞や「な形容詞」、しかも漢語型の名詞や「な形容詞」の連体修飾によくみられるからだと考えられる。

また、表 1 における「問題な日本語」型構文の語例は、比較的多いように見えるが、一時的な造語が多数で、辞書に登録されるような語を作る力はそれほど強くはないし、移り変わりも激しい。これについては、京谷(2019)に興味深い調査があったので、以下に紹介する。

京谷(2019)は、2007年に Google で検索したところ、「スキルな N」(「スキルな人材」「スキルなエンジニア」など)があったほか、「携帯な人」でも 35 件見つかった。しかし、京谷は 2019年に Yahoo で再度検索したところ、「スキルな N」も例文としては N がエンジニアしか見当たらず(「ハイスキルなエンジニア」などが意味上で形容動詞と同じようになるため省くという)、2007年にはあった「スキルな人」や「スキルな人材」はもう見つけれなかった。さらに、「携帯な N」については同様に「携帯な人」は検索ができなかったし、2007年の Google にあった「田舎な N」を 2019年の Yahoo では数個しか見つけれなかったと言っている。

本稿でも試しに、2024年10月25日に Yahoo と Google で上記の諸語をそれぞれ検索してみたのだが、結果は以下のとおりである。

表2 「問題な日本語」構文例のウェブサイトでの検索結果

サイト 語例	Yahoo	Google	備考
スキルな	0件	0件	「ハイスキルな」合せて6件ヒット
携帯な	0件	0件	「ケータイな」も「スマホな」も0件
田舎な	16件	16件	「いなかなか」も含む。後接語が「地域」「街」「地名」であるものが多いため、それぞれ一件として集計する。なお、両サイトには同一文章が載っていることが多い。

上述したように、「問題な日本語」型構文は、まだ不安定な状態であるため、時代や現実状況に応じて推移したり衰退したりすることがあるといえる。

4. 「問題な日本語」型構文の成立

名詞が助詞の「の」で連体修飾機能を果たすというのは、現代日本語文法表現のルールであり、一般規範にもなる。「問題な日本語」型構文は、そういう日本語の規則に反するため、不自然で非文法的な表現だと捉えられても不思議ではなかろう。しかし、前述したように、当該構文は現実的に使用されており、「味」や「現金」などの語における「な形容詞」的な用法は、すでに普通の辞書にも載っており、まともな市民権を獲得しているように思われる。よって、「問題な日本語」型構文は、日本語を乱した表現だといって排斥しようということではなく、いかに生まれたのか、なぜ使用が可能なのかと、納得できるような分析を加えたほうが理想的な対応ではないかと思われる。そこで、以下、そういったところをめぐって検討する。

4.1 名詞と「な形容詞」

現代日本語においては、名詞と「な形容詞」との区分が比較的明白なように見える。例えば、「学校」や「魚」は名詞であり、「賑やか」や「立派」

は「な形容詞」である。このような語の品詞性についてはとくに議論の余地がないが、名詞と「な形容詞」との間における境界線はそれほどはっきりしない場合も多い。この話題に入る前に、「な形容詞」はそもそもどのような品詞なのかを明らかにする必要がある⁴。

4.1.1 「な形容詞」の由来

影山(2009)では、「日本語の形容動詞は非常に問題が多い品詞で、その性質ははっきりしない部分が多い」(p.73)と指摘している。ここからは「な形容詞」用法の不安定さがうかがわれる。では、「性質ははっきりしない」とされる「な形容詞」はどのように生まれたのだろうか。

毛(2014)には、上原(2003)による日本語の「な形容詞」についての考察が紹介されているが、以下引用する。

上原(2003)は、形容動詞という品詞は古代日本語には数が極めて少ないと指摘している。その理由について、上原は次の2つの点を挙げている。まず、「形容動詞は開いたクラス(open class)であり、実際現代語の形容動詞の大部分が漢語を含めた外来語・借用語である」。また、「大多数の形容動詞が和語、外来語に関わらず、もともと名詞であったこと、よって現代語の形容動詞の用法は性状概念へと、もの概念から意味変化を果たしたものである」(上原 2003 : 69)という。(p.19)

さらに、毛(2014)は、永澤(2011)などの研究をもとに、「な形容詞」に関する以下のまとめをした。

形容動詞はもの概念から性状概念への意味変化を通し、抽象名詞から変化してきたものである。この点については、品詞性の変遷による永澤(2011)の研究から証拠を得られた。特に、1917-1925という年間は、「漢語は、品詞を明示する形式を伴わない原初的な名詞として日本語に取り込まれた段階を脱し、形容動詞に特化した和語接辞『-な』といったマーカーを備えた」(永澤 2011 : 147)ということである。すなわち、この年間は抽象名詞から形容動詞への変化が最も盛んであった時期

⁴ 「な形容詞」すなわち形容動詞の認否問題は、本稿の趣旨に合わないため、ここでは取り扱わないが、日本語の品詞論においてかなり重要な課題であるので、詳しくは加藤(2008)、毛(2014)を参照されたい。

であった。但し、変化の程度は語彙ごとに差が残ったため、現代になると、大量の形容動詞は名詞カテゴリーと明確な境界を持たず、辞書には「名・形動」のように載せられている。つまり、形容動詞は従来古代日本語固有のものではなく、長い年月及び様々な変化を経て、ようやく一品詞に至ったものであるが、名詞カテゴリーとの曖昧さから、変化の不完全性も同時に現れたと思われる。(p.22-23)

中山(2004)でも、第二形容詞(=な形容詞)の文法的な形は、起源的には、名詞の文法的な形から分化発達したものである。従って、第二形容詞と名詞とは形式的に近い関係にあり、「健康、自由、貧乏、満足、親切、けち」のように名詞と第二形容詞にまたがる単語がある(p.132)と指摘している。

以上からわかるように、いわゆる形容動詞(「な形容詞」)の大半は、基本的に名詞から転成し、しかも近代以降盛んに生起してきたものであると考えられる。定着史が短いこととあいまって、名詞からの転用がほとんどであるため、「な形容詞」は用法が落ち着かなかつたり、名詞との区分も曖昧になったりするということになったのであろう。

4.1.2 「な形容詞」兼名詞の使用事情

「な形容詞」は、ほとんど名詞からの転用で生まれたのであるが、その過程において、「な形容詞」の機能をほぼ完全にもつものと、名詞の機能を一部維持しているものに分化発達してきたと思われる。前者は本稿の関心ではないため議論しないが、後者はいわゆる品詞兼用のもので、ちょうど名詞・「な形容詞」間の曖昧性を示しうるので、以下、中山(2004)の調査を取り上げ、検討したい。

中山(2004)では、「な形容詞」兼名詞の語に後接する連体修飾形式「な」「の」についての調査結果をまとめたが、ここで、それを一部抽出し、下記の表3に整理する⁵。

⁵ 表3は、中山(2004)による『毎日新聞全文記事データベース CD-毎日新聞 2000年版』の集計結果の一部抜粋である。なお、表中の語例は、『明鏡国語辞典 携帯版』(北原 2003、大修館書店)にはいずれも「名詞」と「な形容詞」の併記がなされている。

表3 「な形容詞」・名詞兼用語の連体修飾における「な」「の」の使用数

語例	な	の
悪質	271	0
意外	328	2
永遠	1	178
過剰	3	155
正式	228	25
相当	214	128
独特	10	980
特別	408	115
普通	0	868
無用	24	37

表中の語はいずれも両品詞兼用のものではあるが、「な」「の」による連体修飾には以下のような比率差がみられる。

ア. 「な」の多用

「悪質」「意外」「正式」が代表例である。

イ. 「の」の多用

「永遠」「過剰」「独特」「普通」が代表例である。

ウ. 「な」「の」の多比率併用

「相当」「特別」「無用」が代表例である。

このように、同じく「な形容詞」兼名詞の語ではあるものの、連体修飾機能が一樣ではなく、三つのパターンを呈する場合がある。ここからは、「な形容詞」と名詞にまたがる語の用法の複雑性と多様性を垣間見ることができる。

4.2 「問題な日本語」型構文産出の可能性

前述したように、「な形容詞」は、名詞から転成してきたことで、名詞の意味用法の機能をまだ備えている場合がある。これがゆえに、連体修飾の際にはその後に「な」使用なのか、「の」使用なのか、それとも併用なのかという曖昧だと思われる状況がときに引き起ってしまうのである。これにつながるのだが、一部の名詞は、属性的な概念を含んでいるため、「な形容詞」に転用することができるのだということもいえる。実際、これは、「問題」「神戸」などの名詞がなぜ「問題な」「神戸な」のように言い表しうるのかという事象の説明になる。つまり、名詞における「な形容詞」の用法は、ゼロから生まれるものではなく、「な形容詞」の形成、変遷、定着の過程と表裏一体の進化、発達を経てなされてきたのだということである。いわば、「な形容詞」と同じような道のりをたどって発展してきたのだといってよい。よって、「問題な日本語」型構文は、日本語の発達、発展に随伴している一言語形態のバリエーションと位置づけられると思われる。

この意味では、「問題な日本語」型構文は、一般にイメージされそうな異常な表現ではなく、日本語のことばの変遷に伴う一種新生の表現手法だと考えてもよいだろう。そして、それは、いつの間にか人々に認識使用され、徐々に今日まで広がってきた言い方にもなる。さらに、その中の一部常用語、例えば「味」「現金」「罪」における「な形容詞」的な用法は、すでに広く認められているため、現在しっかりと定着しており、辞書に登録されるようになったものもある。

とはいえ、「問題な日本語」型構文は、どちらかといえば、まだ非規範的な言い方のように思われ、全体的にそれほど落ち着いておらず、まだ臨時的な段階に留まっている場合が多い。これは結局、京谷（2019）にもまとめられているように、消失したり新生したりする事態が途絶えていないことにつながるのである。

ここまでは「問題な日本語」型構文の成立にかかわる分析をしたが、次にその意味用法の特徴を吟味したい。

5. 「問題な日本語」型構文の意味用法の特徴

5.1 名詞の連体修飾における「な」「の」の使用

「な形容詞」(または「な形容詞」・名詞兼用語)の連体修飾における「な」「の」の問題については先述したところだが、名詞の連体修飾においても「な」「の」の選択がときにみられる。名詞なので、「の」によって後項名詞を修飾するのは当然なわけだが、前述のとおり「な」による修飾例がある。前掲の表2では、本稿による「名詞+な」の簡素な集計があったが、ウェブサイトでの調査で膨大な量の「名詞+の」のケースには触れなかった。これとは対照的に、王(2020)、草野(2018)の調査ではその部分に言及している。

王(2020)では、漢語型形容動詞の品詞機能考察の延長として、名詞から形容動詞へと転換可能だと思われる計12語の調査もあわせて行った。本稿では『明鏡国語辞典 携帯版』(北原2003、大修館書店)で確認したところ、王(2020)で対象となった12語の中には4語だけが名詞であるため、この4語のみの連体修飾に用いられる「な」「の」の使用数の集計結果を以下のように引用する⁶。

表4 名詞の連体修飾における「な」「の」の使用数

語例	総語数	「な」	「の」
恒常	4	4	0
上質	73	33	40
軽度	79	10	69
問題	973	5	968

⁶ 毛(2014)にも紹介してあるように、辞書ごとに語彙の品詞性の扱いが異なることがある。本稿では『明鏡国語辞典 携帯版』(北原2003、大修館書店)に基づいて品詞の認定を行った。なお、王(2020)における調査用のコーパスは、2006に国立国語研究所によって開発された『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ)の短単位語彙表(Version1.1)である。

「問題な日本語」型構文の分析

一方、草野（2018）は、「大人の対応」と「大人な対応」を国語研日本語ウェブコーパス(NWJC)で調査をしてみたところ、従来の使われ方である「大人の対応」が 8433 件ヒットするのに対し「大人な対応」も 2422 件ヒットした。また、「ワインの気分」と「ワインな気分」のヒット件数を比べると、「ワインの気分」が 55 件ヒットするのに対して、「ワインな気分」は 51 件ヒットした (p.20-21 参照)。さらに、草野（2018）では、この結果に「N1+的(ナ)+N2」を加えて、以下の検索結果をまとめた。

表 5 「大人+(の／な／的(な))+対応」と「ワイン+(の／な／的(な))+気分」の用例数

「N1+ノ+N2」	用例数	「N1+ナ+N2」 「N1+的(な)+N2」	用例数
大人の対応	8433	大人な対応	2422
		大人的な対応	21
ワインの気分	55	ワインな気分	51
		ワイン的(な)な気分	1

表 4 の「恒常」「上質」と表 5 の「大人」「ワイン」にみられるように、「名詞+の」との使用比例を比べても、「名詞+な」が相対的に相当な数がヒットする場面があることがわかった。なお、表 5 の「名詞+な」と「名詞的+な」との間に用例の差も確認できた。

影山(2009)では、「脂性な肌、職人氣質な人」のような「問題な日本語」型構文表現については、名詞から形容動詞(=な形容詞)を作る派生接尾辞という新しい造語法とみなすとしている。しかしながら、日本語の派生接尾辞、例えば「～さ」や「～み」は、用法としてかなり定着しており、一時的な存在形式ではない。よって、「よさ」「高み」のように必要に応じて基本的にいつでも使えるはずである。これに対して、「問題な日本語」型構文は、安定した言い方ではなく、「スキルな」や「携帯な」などのように、時代の変化とともに消えたりするものが少なくはない。この意味では、影山(2009)の指摘には少し再考の必要があるのではないかと思われるが、別稿でその考察を試みる。

つづいて次節では、「名詞＋の」ではなく、「名詞＋な」すなわち「問題な日本語」型構文の使用においては、話者がどのような意味合いを伝えたいのかを検討する。

5.2 「問題な日本語」と「問題の日本語」の意味区別

「問題の日本語」だけでは意味が十分に通じるのに、なぜわざわざ「問題な日本語」と表現したのか。これは、たぶん、普通の購読者が『問題な日本語』という本のタイトルを一目で見たときの一大疑問だろう。実は、その書名決定の理由については、編者の北原（2005）は『続弾！問題な日本語』の中で下記の釈明をした。

「問題な日本語」という書名を決めるときには、いろいろ考えました。そして最後に出てきたのが「問題の日本語」でした。「問題」は名詞で、これが名詞を修飾するときには「問題の」というように「の」を付けるのが普通だからです。ただ、これではいささかインパクトに欠けます。「問題な」とすれば、言語感覚の優れた人には違和感があり、目に留めてもらえるのではないかと考え、「な」に変えたのです。

この解説からみれば、「問題の日本語」は文字どおりの意味合いで一般の表現になるが、「問題な日本語」は一種特別な言い方で、人に違和感を感じさせるほど普通ではない表現であるといえよう。この特別性については、本稿の「2. 先行研究の検討」における京谷（2019）が直接に触れた。それによると、「問題な日本語」とは、「問題という実体を表す日本語」「問題である日本語」という意味ではなく「問題という属性（～っぽい、～のような）を持つ日本語」という意味なのだと考えられる。つまり、以前名詞であったものに「な」がつき、そのものが持っている性質を表すようになったということである。

京谷（2019）の主張は、基本的に村木（2012）の説を踏襲しているものといえる。村木では、名詞である「ニュース」「土壇場」を「の」を介してではなく、「な」にスライドさせて用いると形容詞（＝「な形容詞」）になる。この品詞の転成は、意味の変化をもたらす。実体（あるいは対象）を意味した名詞が形容詞にかわると、その実体がそなえている属性へと移行する（p.243-244）と分析している。

つまるところ、「名詞＋の」のかわりに「名詞＋な」（「問題な日本語」型構文）を用いると、話者は、基本的にその名詞に付随しているある種の性質や属性的な意味合い、ニュアンスなどを言い表したいということが考えられる。

5.3 「問題な」と「問題的な」の意味区別

名詞を「な形容詞」化するための恰好の方式は、その名詞に接尾辞の「的」をつけるということであろう。名詞を形容詞化させるという意味では、「名詞＋な」タイプの用法と似たような機能を持つと考えられる。では、名詞の「問題」は、その後に「的」をつけた「問題的」で性質的な意味を十分に表しうるが、何が要因でそれを避けてやや不自然だと思われる「問題な」と言うのか。こういう問題を答えるためには、「問題な」と「問題的な」の間にどういう異同があるのかということをも明らかにする必要がある。

まず「問題的」の言い方についてである。望月（2010）の整理によると、接尾辞「的」は多義語で曖昧であるが、意味用法に基づき次の3種類に分類できる。

- ① 「A 的 B」の意味：「B が A の性質を有している」「B が A（の／する）状態である」（例）：「現実的政策」（現実性ももった政策）
- ② 「A 的 B」の意味：「A のような B」（例）：「父親的立場」（父親のような立場）
- ③ 「A 的 B」の意味：「A における B」「A としての B」「A についての B」「A に対する B」（例）「大衆的人気」（大衆における人気）「音楽的素養」（音楽に関する素養）

この説明によれば、「問題的日本語」とは、①「問題を含んだ日本語」、②「問題のあるような日本語」という意味になる。

次に「問題な」についてである。先の京谷（2019）では、「問題な」というのは問題という属性（～っぽい、～のような）を持つ表現だと説明している。

上述の分析を見比べると、「問題的」の①②と「問題な」の間に意味的にかなり近いということがわかる。換言すれば、ニュアンスの差こそあれ、「問題な」は「問題的」に置き換えてもほぼ同じようなことを表しうると推測される。とはいうものの、なぜ「問題的」ではなく、「問題な」が使用されるのだろうか。これは、北原（2005）の解説から謎解きのヒントが得られる。つまり、「問題的」は、意味用法がすでに定着しているため、何の新鮮さも感じ取れないごく普通の表現になるが、「問題な」は日本語の一般ルールを逸脱した、比較的目新しい言い方で、ある種のインパクトが感じられるということである。これは、結局、対象者の目を引いたり何か強調したいときに、「問題な日本語」型構文を使用することにつながるのだろう。

ここで「問題な日本語」型構文に関する興味深い発見がもう一つある。表5に示されているが、「大人な」「ワインな」に代表される一部の「問題な日本語」型構文は、現実的には「大人的な」「ワイン的な」構文にとってかわりつつある現象が起きている。これについてどう受け止められるのかは今後引き続き見守る必要がある。

6. おわりに

本稿は、「問題な日本語」型構文について、語例の整理分析、表現成立の要因・背景、意味用法の特徴という3点から検討を試みた。全体的にみると、当該構文は、日本語表現の一般的な規範には合わないものの、現実的に使用されたりしている。その背後には日本語の発展と推移の様子が一通りうかがわれる。

比較的新しい用法なので、「問題な日本語」型構文にはまだ未知の部分が多い。例えば、名詞の属性や性質が前面に出てきた場合では、当該構文が使用可能だとされているが、その属性がどのように捉えられるのかは、まだ明らかになっていないように思われる。例えば、「石」の意味領域として、「堅固」「硬い」という属性的なニュアンスを帯びているようにみえるが、「石な（小石の意ではない）＋名詞」の言い方は見つからない。よって、今後そういう問題を含め、「問題な日本語」型構文についてさらなる掘り下げを続けていきたい。

謝辞

本稿の作成にあたり、査読者より貴重なコメントとアドバイスをいただいた。この場をかりて御礼申し上げたい。

参考文献

- 上原聡 (2003) 「何故プロトタイプ理論構造か:日本語の『形容動詞』に見るプロトタイプ構造形成の歴史的考察」『認知言語学論考』ひつじ書房,51-91
- 王逸良 (2020)『連体修飾構造における漢語型形容動詞の「-な」・「-の」形式の使用分析—品詞変化の視点から—』深圳大学未公刊修士論文
- 影山太郎 (2009) 『日英対照 形容詞・副詞の意味と構文』大修館書店
- 加藤重広 (2008) 「日本語の品詞体系の通言語的課題」『アジア・アフリカの言語と言語学』3,5-28
- 北原保雄 (2003) 『明鏡国語辞典 携帯版』大修館書店
- 北原保雄 (2004) 『問題な日本語』大修館書店
- 北原保雄 (2005) 『続弾!問題な日本語』大修館書店
- 京谷美代子 (2019) 「「の」と「な」の連体修飾構造」『佐野日本大学短期大学研究紀要』30,27-42
- 草野達也 (2018) 「「名詞+な+名詞」における形態的・統語的考察」『日本學報』117, 19-39
- 中山陽介 (2004) 「「特別な思い」と「特別の思い」〈第二形容詞〉と〈第三形容詞〉の揺れについて」『阪大日本語研究』16,131-159
- 永澤済 (2011) 「漢語『-な』型形容詞の伸張—日本語への同化—」『東京大学言語学論集』31,135-164
- 村木新次郎 (2012) 『日本語の品詞体系とその周辺』ひつじ書房
- 毛莹 (2014) 『第二言語としての日本語における漢語系形容動詞の習得研究—プロトタイプ理論の観点を中心に—』九州大学公表博士論文
(<https://doi.org/10.15017/1441001>)
- 望月通子 (2010) 「接尾辞「~的」の使用と日本語教育への示唆—日本人大学生と日本語学習者の調査に基づいて—」『関西大学外国語学部紀要』2,1-12